岩波
古語辞典

大野晋
佐竹昭広 編
前田金五郎

岩波
古語辞典

大野　晋
佐竹昭広編
前田金五郎

岩波書店

岩波 古語辞典

1974年12月25日　第1刷発行 ©
1978年 9月12日　第5刷発行　　¥2200

編　者　大野晋（おおの すすむ）
　　佐竹昭広（さたけ あきひろ）
　　前田金五郎（まえだ きんごろう）

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
　　株式会社 岩波書店
　　電話 (03)265-4111
　　振替 東京6-26240

印刷：精興社　製本：牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

序にかえて

長いこと力を注いで来た古語辞典の世に出る日が近づいた。その仕上りの形を見ると、まことに小さい一冊である。しかし、このささやかな辞書にもそれなりにこれを世に送る志があり、成立の経過がある。今そのおよそのことを記しておこう。

だれしも、日本人であれば、知的世界に目覚めたとき、眼前にヨーロッパ・アメリカの学芸と技術とを見るであろう。それを学び取ることが日本の将来をきりひらくと多くの人は考える。しかし、ヨーロッパ・アメリカに学ぼうとする主体である日本とは一体何であろうか。日本の思想や文化の源流を尋ねるには、さまざまの道がある。しかし、その中で私は、日本語を明らかにすることによって、日本を知るという行き方を選んだ。日本語の根源を明らかに知るために、私は古代日本語を学び、その展開として、日本語の系統あるいは成立を知ることを重要な課題と考えた。そこで私は日本語とアジアの言語との比較を試みたことがあったが、その際に、基礎語なるものが実に重要であることを身にしみて感じた。基礎語は、日本人の物の判断の仕方を根本的に規制している。また、それは長い年月にわたって使われ、変化することが少ない。日本を理解するために、基礎語の個々の意味を明確に把握することは、一つの大事な仕事である。

その考えによってこの研究に進み入ろうとしていた私は、たまたま「広辞苑」(初版)の基礎語項目約一千の執筆を委嘱され、それに没頭した。ところが「広辞苑」刊行のお祝いの席上、当時の編集部長稲沼瑞穂氏から「古語辞典」を作るつもりはないかという思いがけない言葉があった。それがこの辞書の具体的な出発である。

由来わが国では「字引き」という。不明の漢字の字形・字音・和訓を手軽に知ればそれで終りである。ヨーロッパ語についての辞書もその習慣を引きついでいる。意味不明の語を辞書に求め、当面の文脈にとって適当と思われる訳語が安直に知られれば足れりとする。しかし、辞書はそれでよいものなのか。

言語社会における単語は、人間社会における個人に比せられる。人間は、生まれ、成長し、活動し、老化し、死去するという経過を歩む。単語も一つの役割を負ってその言語社会に誕生し、多くの単語の力関係の中で活動し、やがて老化して意味が片寄り、衰えて去るという一生を持つ。広く使われて豪華に生きる単語、全く異なる意味に変身して世を渡る単語、ひそやかに言語社会の片隅に生きる単語がある。児が親の性格をうけつぐように、単語も親の語の意味の血筋をひく。その親の語も、さらにさかのぼれば古い二つの親の語の結合として分析できることが多い。本当は、辞書は単に文脈にかなう訳語を探す場であってはならないものである。辞書は一語一語の出生、活動、老化、

死という語の生涯の記録を読み取る場でなければならない。

殊に日本人の思考の根幹をなす基礎語のごときは、簡単な訳語の羅列によってはその意味を十分には示し得ない。文章を以てその単語の意味を記述し、時に類義語の意味まで併せ記して、その語の個性を明確に弁別する必要がある。それによってはじめて単語の意味の根源を読者に伝えることが可能となり、単語の意味を別の単語で置き換えるという従来の方式を脱した新しい古語辞典とすることができるだろう。

私はこの辞書に着手するに際して、日本語の種々の特質がこの辞書の使い手によって、出来る限り理解されるようにしたいと思った。それがためには、語の見出しの立て方を改めるのも一つの重要な事柄であると考えた。それは動詞の項目の見出しに関することである。今日では、動詞は終止形を見出し項目として配列するのが普通である。しかし、終止形は実は全活用形の中で、わずか一割前後の使用度数しか持たない。最も多いのは六割に達する使用度数を持つ連用形である。連用形は名詞形(遊び・歩き)でもあり、複合語を作るにもそのまま前項となる(遊びくらす・歩きまわる)。古典語の終止形は現代語では形の異なるものがあるが(起く→起きる・受く→受ける)、しかし、連用形ならば古典語も現代語も同形である(起きて→起きて・受けて→受けて)。従って、動詞を連用形(起き・受け)で見出しとすれば、文献に出てくるままの形で語を検索できる割合が高い。動詞と名詞との関連も把握しやすい。そして、終止形を求め出す困難なしに動詞項目を引くことができるであろう。これは、連用形が動詞の基本形であるという国語史的事実の反映である。

以上のような考えをもってこの辞書に臨んだのであるが、これを実際に具体化することは至難のわざである。到底私一人のよくなし得るところではない。幸いに前田金五郎・佐竹昭広両氏の参加を得て、三人の協力によってこの辞書の編纂に当ることとなった。古代を大野、中世を佐竹氏、近世を前田氏が主として分担することとした。

はじめは長くとも数年にしてこれを完成できるであろうと考えていた。しかし進むほどに、これは、大海の波濤の中を小舟で漕ぎ渡ろうとするに似た困難な仕事であることを悟らねばならなかった。行けども行けども波は押し寄せて来た。単語に対して誠意をもって努力すればするほど進行は遅くなった。一応の原稿が出来上って、訳語・例文の検討の会合が重ねられるようになってからは、白熱した応酬が交された。主張が分れ議論の激することも屢々あったが、それも、よい辞書を作りたいという三人に共通の情熱から出たものであった。私はこれらの議論を通じて少なからぬ啓発をうけた。

中世・近世の文献は、数も膨大であり、内容も多岐にわたる。未翻刻の写本あるいは板本の類の、見るべきものも多い。しかもこれらの資料を的確に掌握しなければ、語史を一貫したものとして記述することは不可能である。本書はつとめてここに力を注いだ。それによって、基礎語はもとより、中世・近世の多くの語について、新しい見解に到達したところが少なくないと思うが、これはまさに佐竹・前田両氏の

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

努力の成果である。

振り返ってみれば、この二十年は私の壮年の時期のすべてに当る。私としては、ほぼ力の限りをつくしてここに到達したように感じる。おそらく前田・佐竹両氏も同じ思いであるに相違ない。しかも、果してこれは所期の内容を十分に実現したのかと問われれば、ただ、かなり誠実に奮励しつづけて来たとしか申しようはない。力及ばず、行きとどかなかった所も多々あると思う。それについて博雅のお教えを心から願う。

なお、ここまで内容を整え得たについては、多数の方々に長い間にわたってお世話になった。

朝尾直弘　石田瑞麿　伊藤正義　上横手雅敬　金岡　孝　木下正俊　久保田　淳　今野　達
鈴木　博　須山名保子　高橋喜一　高橋正治　高橋貞一　立平幾三郎　土田直鎮　中村義雄
林　勉　柊　源一　広瀬秀雄　福山敏男　松崎　仁　松田　修　宮地敦子　望月郁子
安田　章　山口明穂　山田珠子　山中　裕　山辺知行　（五十音順）

特に右の諸氏には、或いは専門の事項について御校閲を仰ぎ、或いは原稿の作成、内容の整理について御助力をいただいた。また、覆刻本・校訂本・索引・研究書など公刊された先学の業績に負うところが多いのはもちろんであるが、特にこの仕事のために愛蔵の貴重な資料を使わせて下さり、また直接間接に御教示を賜わった方々も数多い。

なお、昭和三十年初夏の着手以来、遅々たる仕事の歩みにもかかわらず、岩波書店は辛抱強く見守ってくれた。編者と書店編集部との緊密な協力なしには、現代において辞書をつくる事はできない。殊に最近の数年、辞典編集部は、原稿の整備のみならず、時に適例を示し、語釈の不備を指摘するなど、援助を惜しまれなかった。

以上を記して、編纂の責任を共に負う前田・佐竹両氏ともども厚く感謝の意を表したい。

昭和四十九年初秋

大野　晋

凡　例

一、この辞典には、上代（奈良時代）から近世（江戸時代は前半期を主とする）に至る、日本の古典にあらわれる主要な語彙を収めた。見出し項目の数は四万余であるが、語源を同じくする語は原則として一つの見出しの下にまとめて解説したので、収録語の実数は約四万三千である。

二、この辞典を使用されるに際し、あらかじめ次の事柄をご承知おきいただきたい。

1　動詞および動詞を作る接尾語の類は、項目をかかげるにあたって、終止形ではなく、連用形を見出しとした。動詞の連用形は、そのまま転成して名詞としても使われることが多いので、一括して解説しうるなどの利便があるからであるが、詳しくは「序にかえて」に述べた。

2　欧米語のように動詞を自動詞と他動詞とに判然と区別することは、日本語の場合には無理があるので、一つ一つの語についてその区別を示すことはしなかった。

3　品詞の一つとして形容動詞を立てる学説もあるが、本書ではこの説によらず、その語幹に相当する語を名詞として扱った。また、擬態語・擬声語の類も名詞とした。

4　この辞典が採用した歴史的かなづかい、特に字音かなづかいは最近の研究に従い、通説と異なるものがある。個々の語については「歴史的かなづかい要覧」を参考していただきたい。

三、助詞・助動詞は、その機能や使われ方などによって分類し、まとめて説明する方が、その文法的役割を理解しやすい。基本的な助詞および助動詞については、本文の末尾に一括して概説した。

四、付録として、平安時代における官制の実態について土田直鎮氏に「官職制度の概観」を、また広瀬秀雄氏に「日本の時刻制度」を執筆していただいた。「内裏・大内裏図」は福山敏男氏の監修のもとに作製した。

見出し語

一、見出しは、歴史的かなづかいにより、太字で掲げた。和語・漢語には平がなを、外来語には片かなを用い、拗音・促音は小字とした。

（例）あづま【東・東国】　ちうしう【中秋】
きゃうざう【経蔵】　タバコ【煙草】

二、動詞・形容詞・助動詞など、語尾が活用して変化する語は、その変化する部分と、しない部分との間を「・」でくぎった。

（例）い・き【行き・往き】【四段】　あらまほ・し【連語】
たづ・ね【尋ね】【下二】　ら・む【助動】
はや・し【速し・早し】【形ク】　ば・み【接尾】

三、動詞・助動詞で、見出し語が一音節の場合は、当然のこととして「・」は付けないが、他の語の下に付いて複合語（句）をつくる時は、左の通りとした。

（例）いで・ゐ【出で居】【上一】
あれかにもあら・ず【連語】

四、見出しのかなに相当する漢字の表記形を、［　］内に示した。

五、［　］内には、もっとも標準的と思われるものを掲げ、特殊な異体字や無理な当て字の類を掲げることは避けた。必要と認められる場合は解説・用例中などに示した。

（例）とかく【副】《「兎角」は当て字。…》
あせらか・し【四段】……。「黒猫を愛堪（ふか）し」
じゃうき【常器】《「定器」とも書く》

排　列

一、見出し語は、五十音順に排列した。

1　清音・濁音・半濁音の順とした。

（例）くひつ・き【食ひ付き】　さんばい【散配】
くひつぎ【食継ぎ】　さんぱい【三拝】
くびつき【頸着き】

2　促音・拗音は、直音の後に置いた。

（例）かって【曾て・嘗て】【副】　きよう【器用】
かって【勝手】　きょう【興】

二、見出しのかな表記が全く同じである場合は、順次、左の基準に従って排列した。

1　品詞の順

(イ)　自立語のうち活用しないもの――代名詞・名詞・副詞・連体詞・接続詞・感動詞

(ロ)　自立語のうち活用するもの――動詞・形容詞

(ハ)　付属語――助詞・助動詞

2　和語・漢語（字音語）・外来語の順

3　一一内の字数の少ないものから多いものへ、首字の字画数の少ないものから多いものへ、の順

（例）か【彼】【代】　かっぱ【河童】（和語）　あざ

か【処】（和語）　カッパ【合羽】（外来語）　あざ【疵】

か【荷】（漢語）　あざ【痣】

か【接頭】　あざ【青虫】

か【接尾】

三、複合語は、その前項に相当する語が見出し語として掲げてある場合には、それを親項目として、その下に五十音順にまとめ、追込項目とした。ただし、一語意識の強い語は、独立の項目とした。

1　追込項目の見出し表記は一般の見出しの場合と同じだが、その親項目に相当する部分を「―」で略示した。

2　親項目とする語は、見出しのかなが三字以上のものに限った。

（例）かた・り【語り】〔四段〕……。〔名〕……。―な・し【語り成し】〔四段〕……。―べ【語部】……。

ただし、漢字一字の字音語は親項目としなかった。

（例）きょく【曲】に、「曲水」「曲乗り」「曲（ぎょく）り」は追い込まない。

また、形容詞は、その語幹を親項目としてこれに追い込むことをせず、独立の項目とした。

（例）あたら【可惜】《アタラシの語幹》

あたら・し【惜し・新し】〔形シク〕

四、諺・成句などは、親項目の見出しのかなの字数にかかわりなく、これに追い込んだ。この場合、漢字・平がなまじりで見出しを立て、親項目に相当する部分を「―」で略示した。親項目が活用語の場合や漢字表記が異なる場合などは、「―」で略さなかった。

（例）おに【鬼】……。―の念仏……。―の目に涙……。

あい【愛】……。―に愛持・つ……。―をな・す……。

く・ひ〻【食ひ】〔四段〕……。食はぬ養生（やうじ）……。食はねば ひだる・し……。

あさま・し【浅ましし】〔形シク〕……。浅ましくな・る……。

五、便宜上、仮に親項目を立てて、これに追い込んだ場合もある。

（例）いきうま【生馬】―の目を抜く

読み方の表記

一、見出しのかなづかいが現代かなづかいと一致しないものには、見出しの下に片かなで小さく割書きし、現代の慣用的な読み方を示した。異同のない部分は「：」で略した。

二、ただし、次のかなには示さなかった。

(イ)　「ぢ」「づ」「ゐ」「ゑ」「を」

(ロ)　「くゎ」「ぐゎ」「くゎ」「ぐゎ」「ぢゃ」「ぢゅ」「ぢょ」

＊「くゎん」の類は示さなかったが、「くゎう」「ぢゃう」「ゑう」の類は示した。

（例）あきな・ひ【商ひ】　はなゑみ【花咲み】

あひたい【相当】　しふぢゃく【執着】

かふおつ【甲乙】　がふくゎん【合巻】

みやづかへ【宮仕へ】　ぢゃうばん【定番】

三、追込項目では、親項目に当る部分をはぶいた。

四、連声音は示したが、カ行音の連続によって生ずる促音は示さなかった。

（例）くゎんおん【観音】

あくき【悪鬼】（ッとしない）

品詞および活用の表示

一、品詞などの別、および活用の種類を、〔　〕内に略語で示した。（「記号・略語表」参照）

二、名詞のみの項目では、品詞の表示を省略した。

三、枕詞でもなく諺・成句でもなく、また一単語とも見られぬもの

を、連語として扱ったが、体言型の連語では、その表示を省略した。

（例）あな・り〔有なり〕【連語】　あがおもと〔吾が御許〕
あえぬがに〔連語〕　あきのくるかた〔秋の来る方〕

語義解説

一、解説文は、現代かなづかいに従った。
二、読みにくい漢字には、（）でかこんで読みがなを付けた。特に歴史的かなづかいで示す場合は、〈〉でかこんだ。
三、外来語や動植物名、特殊な用語などのほか、語の発音や語形を特に示す場合は、片かなを用いた。
四、語源・語史・語法、類義語・対義語、位相など、その語についての概括的な説明を、解説の冒頭に《》でかこんで述べた。
五、補足的な説明には、▽を付した。また、音韻変化の推移、外来語の原綴などを示す場合も同様とした。
六、術語・位相については、必要に応じて、解説の始めに〔〕でかこんで示した。

（例）けしゃう〔化生〕〔仏〕（仏・仏教語）
ひさかたの〔久方の〕〔枕詞〕
あんも〔餅〕〔小児語〕
こぼ・し〔覆し・零し〕…③〔連俳用語〕

七、上代特殊仮名遣に関係のある語は、その項の末尾に†を付し、ローマ字綴りでその発音を示した。なお、ローマ字綴りに・を付したものは、その推定形であることを示す。〔用語〕について―上代特殊仮名遣の甲類・乙類―参照）

用　例

一、語義の理解を助け、また典拠を明らかにするために、かならず用例を掲げた。用例は比較的古いものから適例を選び、かならずしも初出にこだわらなかった。
二、用例を二例以上掲げる場合はおおむね時代順としたが、古辞書の類は、末尾に置いた。また、古辞書本文の引用は省略して、その書名のみを掲げたものもある。
三、用例は、読解の便を考慮して、左の方針のもとに整理を加えた。

1　読みにくい漢字をかなに改め、かなの多い文には適宜漢字を当て、句読点・濁点・読みがな・送りがなを補い、また拗音・促音を小書きにするなどして、読みやすくした。かなは古辞書類を除いて平がなとし、かなづかいは、近世後期の特異例のほかは、歴史的かなづかいとした。また、用例においては、（）内の読みがなも歴史的かなづかいに従った。
2　古辞書類は必要な部分を抄出し、清濁については編者の判断によったものもある。日葡辞書などは片かなにうつした。
3　原典が漢文体である場合は、これを読み下し、または返り点を施した。
4　見出し語に相当する部分は「―」で略示した。活用語の場合は、変化しない部分を「―」で示し、活用語尾をその下に記した。
5　見出し語と形の異なる場合、または、連用形が一音節の動詞などは、「―」で略さず、また、原典の表記形を特に示したい場合も「―」で略さなかった。
6　わかりにくい語には（）でかこんで注を施し、または、〔〕でかこんで語句を補い、文脈として理解できるようにした。この補注・補記は、現代かなづかいによる漢字まじり片がなとした。

（例）もてな・し〔持て成し〕日〔四段〕……。③物事に対処する。「〔薫ハ〕例の、事にふれて、すきまじげに世（男女ノ仲）を―すと、〔句宮ハ〕憎くおぼす」〈源氏総角〉
ひとはぶね〔一葉舟〕……。「木隠れに浮かべる秋の―誘ふ嵐を川長（船長）にして」〈廻国雑記〉
あまつそで〔天つ袖〕……。「をとめ子も神さびぬらし―ふる（振ル・古）き世の友鈴（鈴）経ぬれば」〈源氏少女〉

7　連歌・俳諧を付合の形で引く時は、前句と付句との界を「／」でくぎった。雑俳の冠付などの題との界も同様とした。

（例）はまをぎ〔浜荻〕……。「草の名も所によりてかはるなり／難波のあしは伊勢の―」〈蒐玖波集一四〉
ひゃくだんな〔百檀那・百旦那〕……。「粗相也／薄茶一服―」〈雑俳・紅葉笠〉

出　典

一、用例の末尾に〈〉でかこんで出典名を示した。

二、出典名の下に、必要に応じて巻名（巻数）・章段名（章段数）などを小字で示した。

万葉集および古今和歌集以下の勅撰・準勅撰の和歌集の歌に国歌大観番号を付したほか、記紀歌謡・梁塵秘抄などでは歌謡番号を、日本霊異記・宇治拾遺物語などでは説話番号を付した。古文書・古記録の類には日付を示した。また、訓点資料には、「法華義疏長保点」のように、その訓点の施された時期を添えた。

三、出典名は略称としたものもある。「和歌集」「物語」「日記」などの文字を略して掲げたものが多い。

四、室町・江戸時代の文学作品のうち、御伽草子には「伽」、浄瑠璃には「浄」などと略号を冠して、その作品の属するジャンルを示した。

＊「伽」は狭義の御伽草子（渋川板二十三篇）のほか、広く室町時代物語に冠した。それらの個々の作品は、書名や体裁を異にし、本文に相違・異同のあるものが少なくないが、出典名としては、まま代表的な呼称に統一し、細かい区別をしなかった。

五、同一作品で本文に異同のある二種以上の本を用いた場合、出典名としては、その区別をしなかったものがある。また、仮名抄の類のように、書名は同一でありながら内容の異なるものを共に用いた場合も、その区別をかならずしもことわらなかった。

六、出典名・ジャンル名などの略語については「記号・略語表」に表示した。

「用語」について

上代特殊仮名遣の甲類・乙類 ――奈良時代の発音――

平安時代以後の日本語と奈良時代の日本語とを比較して最も大きい相違は、平安時代以後には母音がａｉｕｅｏの五つであるのに、奈良時代には母音がａｉｕｅｏの他にｉｅｏという三つがあって、合計八個あったという点である。これは単語の意味を考えたり、語源を推定したりする場合に是非心得ていなければならないことである。それでこの辞典では、奈良時代にその母音の区別のある音節を含む語について、その項目の末尾にローマ字で注記をつけた。そこで、録音機もない古代の発音がどうして推定できるのか、それはどんな影響を与える事柄かということの大体をここに説明しておくこととする。

奈良時代に母音が八つ区別されていたことは万葉仮名の用法の分析の結果判明した。今、コの音に例をとってみよう。記紀万葉以下の奈良時代の文献には、古・故・姑・孤・許・虚・挙・居・去などの万葉仮名があって、これらはみなコにあたる万葉仮名と思われていた。ところが詳しく調べてみると、次のような事実が分った。

例えば「古」の仮名について、それを用いて書く語をあげてみると、恋ひ、恋ほし、男、子、越す、畏し、彦、都、石竹花（なで）などである。これと同じようにして「故」「姑」以下の万葉仮名・書いてある単語を実例について調べ上げ、それを整理すると次のようになる。

古―	恋ひ	恋ほし	男	子	畏し	彦	…
故―	恋ひ	恋ほし	男	子	畏し	彦	…
姑―	恋ひ	恋ほし				山彦	…
孤―	恋ひ	恋ほし	男	呼子鳥			…

許―	こそ（助詞）	事	此の	心	衣	言	来（く）	…
虚―	こそ（助詞）	事	此の	心	衣		来	…
挙―	こそ（助詞）		此の			言		…
居―		事		心				…
去―	こそ（助詞）			心	衣	言	来	…

右の表で、古・故・姑・孤の四字は、恋ひ、恋ほしのコを共通に書いている

から、この四つの万葉仮名は同じ音を表わしていたものと考えられる。更に調べると、ヲトコ(男)のコを書くのは古・故・孤であり、ヒコ(彦)のコを書くのは古・故・姑である。このように、多くの語例について調べてみても、これら四字の万葉仮名が同一の音を表わす一群であることはたしかである。そこでこれをコの甲類と名づける。次に許・虚・挙・去について調べると、助詞「こそ」のコを書く点でこの四字は共通である。また、許・虚・居は、コト(事)のコを書く点で共通である。従って、許・虚・挙・居・去は同一の音を表わす一群と推定できる。以下多くの単語の例を見ても、これら五字が共通の音を表わす一群であることは確かである。しかも、この群の中へは先のコの甲類の仮名は一字として入っていない。従って、この群はコの甲類とは別であり、これをコの乙類とする。

コの甲類とコの乙類とに使われている漢字を一見すると、古・故・姑・孤は現代ではコの音であり、許・虚・挙・居・去はキョの音である。これによれば甲類と乙類との間に発音上の相違のあったことが想像される。その実際を明らかにするには、七世紀、八世紀頃のシナ語の発音を研究し、古・故・姑・孤・許・虚・挙・居・去などの文字の発音を確かめれば、奈良時代のコの甲類とコの乙類との音を知ることができる。その研究の結果、現在のところ、コの甲類はko、コの乙類はkö と考えるのが学界の趨勢である。

こうした甲類・乙類が区別される音節はコだけではない。キギヒビミケゲヘベメコゴソゾトドノヨロのモの音節を加える。また、ア行のエeとヤ行のエyeとの間にも区別があって、この区別だけは平安時代はじめ約百年の間は保たれていた。以上を一覧すると次のようになる。

甲類	ki	gi	hi	bi	mi	ke	ge	he	be	me	ko	go	so	zo	to	do	no	(mo)	yo	ro
乙類	kï	gï	hï	bï	mï	kë	gë	hë	bë	më	kö	gö	sö	zö	tö	dö	nö	(mö)	yö	rö

こうした事実が奈良時代に存在したことがどんな意味を持っているかについて二三記しておこう。まず、語源の研究に影響する。例えば、神(カミ)は上(カミ)にいますものだからカミというのだという説がある。ところが「神」について万葉仮名を調べてみると、方言以外では加微・伽微・伽未・可未・可尾などと書いてある。微・未・尾などはミの乙類mïの音と推定されているから、神はkamïであったことになる。ところが「上」は可美・賀美などと書いてあり、美はミの甲類miの音と推定されている。従って上はkami であった。kamï と kami とでは発音が別であるから、この二語は関係ない語であると判断される。それ故、上(カミ)にいますから神(カミ)というとする語源説は、平安時代以後の五母音の解釈の上でも種々の影響がある。例えば、「許久波(くくは)」とあるものを、従来、小鍬(くくは)と解釈して来た。しかし「小(こ)」はコ甲類koの音の語であるのに、原文にある「許久波」の「許」は、コ乙類kö に属する万葉仮名である。従って、これを小鍬と解釈するのは誤りとなる。そこでkö の音にあたる語を探すと、木(こ)の葉、木(こ)の間、木立(こだち)などの「木(こ)」がコ乙類kö である。そこで「許久波」とは小鍬ならぬ木鍬(くくは)であろうと推定する。事実、正倉院にはすべて木製の鍬がある。

この八母音の区別は、動詞の活用との間にも種々の注意すべき関係がある。例えば咲カ・咲キ・咲ク・咲ク・咲ケ・咲ケのような四段活用の動詞の已然形と命令形とは、従来同一の音だと思われて来た。ところが奈良時代の万葉仮名を調べてみると、已然形の咲ケはpakëで、命令形の咲ケはpakeである。つまり、奈良時代には、四段活用の已然形と命令形とは別の音であったことが判明した。また、四段活用の連用形と、上二段活用の連用形とは同音であると思われて来た。しかし、四段活用の連用形は、例えば咲キ、交ヒ、組ミについて見ると、saki, kawi, kumi でイ列の甲類が必ず現われる。それに対して上二段活用の連用形は、例えば尽キ、恋ヒ、廻(モ)ミについて見ると、tukï, koï, tötï でイ列の乙類が必ず現われる。つまり、四段活用動詞の連用形にはイ列甲類iが規則的に現われるに対し、上二段活用動詞の連用形にはイ列乙類ïが規則的に現われる。このように文法との関係も深いのである。こうした重要性に鑑みて、この辞典では、甲類乙類に関係ある音節を含む単語をローマ字表記して、その甲乙類の区別を示すこととした。

なお、奈良時代の発音には、現代と異なる点がいくつかある。その主な点をあげると次の如くである。

今日ではハヒフヘホの音をhahihuhehoと発音するが、奈良時代には上下の唇を近づけてファフィフフェフォのように発音したと推定されている。それは英語のfとも相違するもので、φという記号で書くこともあるが、本書ではそれをfで書くこととした。

ワ行音は、ワヰウエヲでwawiuewoの音であったと推定されるが、現在では唇の運動の退化によって、waだけが残り、wiwewoの音の頭子音wは脱落してしまった。

サ行音は、今日ではsafisusesoとなっているが、室町時代にはsafisufesoの音であったことが種々の資料によって判明している。奈良時代のサはtsa であったとする説もあり、ス、ソもtsu, tso ではないかと考えられるが、種々の説があり定説を得ないので、サ行子音はすべてsで表記することとした。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

タ行音は、今日では ta tʃi tsu te to となっているが、鎌倉時代には ta ti tu te to であったことが証明されている。万葉仮名の漢字音から見ても奈良時代のタ行子音はすべてtで、ta ti tu te to であったと推定される。

なお、このように奈良時代の発音がこまかく分ってくると、オは奈良時代には o でなく ō だったと推定される。そしてコ乙類 kō、ソ乙類 sō などの母音の ō は、一つの語根の中で ō とは結合するが、o とは仲が悪く共存しないことが分った。例えばソヨグ(戦)、ソソク(注)、コロス(殺)などは soyogu, sosoku, korosu と、ō だけで連続している如くである。そこで、コヲロ、トヲヲなどの擬態語や、トホシ(遠)、ノボル(登)などの場合に、ホ、ボ、ヲには普通 hō, bō, wō と wo, bo, wo との区別はないのだけれども、推定形のしるし(*)をつけずに kōwōro, tōwōwō, tōrōsi, nōbōru のように ō を用いて表記することとした。また、モに関しては、古事記および上のような音韻の法則によって確定できるものは甲乙類を区別したが、その他は甲類の表記とした。

同根・同源

日本語には何万という単語があるが、その多くは複合語である。たとえばキハ(際)という語があると、それと複合して多くの単語が作られている。キハギハ(際々)、キハコト(際異)、キハズミ(際隅)、キハタカシ(際高し)、キハタケシ(際猛し)、キハドシ(際利し)、キハヤカ(際やか)、セトギハ(瀬戸際)、ナミウチギハ(波打際)などである。キハという語は、先が切り落されているような、断崖絶壁の所をいうのがもとの意味で、そこから、ぎりぎりの所、極限、どたんばなどの意味が展開して来たものと思われる。右にあげた単語の他に、キハマリ(極まり)、キハミ(極み)、キハメ(極め)という語がある。これは漢字では普通「極」という字をあてるので、キハ(際)とは別の語と思われやすいが、本来の日本語(やまとことば)では、キハ(際)とキハ(極)とは同じなので、キハマリ、キハミ、キハメという単語は、キハという基(1)をもって発展した一つ仲間の単語であり、単語を作るもとになっているキハは、いわば一つの樹の根のようなもので、そこから多くの幹を分出させている。

キハと多少異なる様相を示すものにツブ(粒)という語がある。丸い小さい立体をいう。ツブツブとは丸く太ったさまであり、ツブラとは丸丸した目などの形容にいう。ツブテとは丸い小石。ツブリとは丸丸した頭。ツブフシ、ツブナギとは足のくるぶしをいう。これも丸い突起による命名である。ツブレシとは丸い石のことであり、動詞のツブレは筆先などの丸くなることが古い意味である。してみるとこれらの語群からツブという語根が考えられ、これらは皆、丸い形という共通点をもつ。ところがこれが副詞に拡大して使われると、多少、意味が広がってくる。ツブニといえば、すっかり、すべて、ツブトもすっかり、すべての意。ツブサニといえば、すべて、みんな、あるいは周到に、の意を表わす。これは語根ツブが丸丸としたものという意を表わす所から発展して欠けたところなくの意を表わすように広がったものである。してみると、ツブト、ツブニ、ツブサニも、ツブツブ以下の先の語群の一員である。これだけでなく、多少語形が相違しても、同じ語根の発展と見えるものがある。ツビという語がある。巻貝という意味である。また動詞ツビは、筆の穂先の丸くすりきれることをいう(後世ではチビタという)。ツビは、音形がそのままにはツブとは一致しないが、意味の上から見て、ツブの転じた形に相違ない。従って、ツビもまた、ツブと語根を同じくする語と見ることができる。このような語群を同根であるという。

同根の関係は次のような単語の間にも想定できる。例えばイシ(石)、イソ(磯)、イサゴ(砂)、イスノカミ(石の上、地名)。イソとは海浜の岩石の多いところをいう語であり、イサゴとはイサのコ(石の子)の意、イサコ(石子)の転であるに相違ない。これらをローマ字で書けば isi, iso, isago, isunokami であるから、これらの語の語根としては is が想定できるであろう。こういう例はアサ(朝)、アサテ(明後日)、アス(明日)、アシタ(朝・明朝)の間にも認められよう。これらは皆夜が明けるという観念を含んでおり、asa, asite, asu, asita に共通な sa という形が、これらの語根であると見ることができる。従ってアサ(朝)とアス(明日)などを同根の語という。

これに似た用語として「同源」という語をこの辞典では使用した。それは主に古代日本語と朝鮮語との間に類似する単語の見出される場合である。例えば、コト(事・言)というやまとことばがあるが、朝鮮語にも kŏt(事)という語がある。また、日本語でサデアミという川魚をすくう網があるが、朝鮮語にも sadŭri という方言があって、手に持つ網の意である。これらの場合、日本語と朝鮮語とが系統論上同系と決定していれば、右の kōtō と kŏt などを同系の語といえるが、日本語と朝鮮語との系統関係はまだ十分証明されていないので、これは朝鮮語から日本語が借り入れたかもしれないし、日本語から朝鮮語へ広まった場合もあるかもしれない。あるいは同系語かもしれない。この事情を考慮して、それらを一括した概念として「同源」という語を用いることとした。

ク　語　法

今日「いわく」「恐らく」などというが、これは、奈良時代には極めて活潑に行なわれていた造語法の、化石的な残りである。奈良時代には「有らく」「語らく」「来(こ)らく」「為(す)らく」「老ゆらく」「散らく」などがあり、ク語法と呼ばれる。

これは前後の意味から、有ルコト、語ルコト、来ルコト、スルコト、年老イルコト、散ルトコロの意味を表わしていたことが分る。従ってクは、コトとかトコロの意味だということは分っている。コトとかトコロとかの意ならば、クは名詞だから、活用語の連体形を承けそうなものであるのに、「有ら」「語ら」などと未然形を承けている。その上、「来(く)ら」「為(す)ら」「老ゆら」などという活用形は他に例がない。そこで、単純にクを名詞としにくくなった。

奈良時代の日本語には、一つの特色として、母音が二つ連続することを極度に嫌う発音上の習慣があった。だから、もしも母音が二つ連続すると、(イ)その一方が脱落する。多くの場合、前の母音が脱落して後の母音が残る。(ロ)二つの母音が融合して別の母音をつくる。例えば i と a という母音が連続する場合には、二つが融合して ē=e という変化を起す。この(イ)(ロ)のどちらかであった。

ところで、アクガルという古い動詞がある。居る所を離れて浮かれ出るとか、物事から心が離れてさまようとかいう意味の語である。これはアクとカルとの複合語で、カルは離(か)る」という動詞であろうから、アクは「所」とか「事」とかいう意味の名詞と見られる。アクという名詞はこの複合語に残った他は亡びてしまって、単独に用いられた例は、文献に見えない。しかし、これが活用する語の連体形を承けたものと考えるなら、ク語法は統一的に説明される。

例えば「来(く)」という動詞に例をとれば、

kuru+aku→kuruaku→kuraku

右の例で分るように、クルという連体形にアクという名詞が続くと、kuraku となる。ここに ua という母音連続が起る。このような場合は、先に記した(イ)にあたるので、前の母音の u が脱落して、後の母音の a が残るのが奈良時代の例である。だから kuraku という形が変って kuraku となるのは極めて自然だと思われる。このクラクという形が、文献に見える形である。この見方によると、ただ一つの例外を除いて、他は全部きれいに説明できる。ことに、助動詞・形容詞のク語法の場合も統一的に理解出来る(上表参照)。

ただ一つの例外というのは、回想の助動詞キの連体形シにアクの接続した場合である。この場合は、他の例にならえば si+aku→siaku→sēku すなわちセクという形になりそうだが、シクという形になる。この場合のシは連体形であるから、イツク(何処)のク(意味はやはり、所とか事にあたる)がついて、アクはつかなかったものと考えられる。何故アクがつかないかといえば、シの母音の性質が、たぶんイ列甲類の母音 i とは異なって、ï というイ列乙類の母音であったからだろうと思われる。ï という母音の下には a は続かないのである。

こうした唯一の例外があるけれども、右に述べた aku の説は、これまでの説のうち最も合理的であると認められる。

母音交替・子音交替

日本語で新しい語を作るには、二つの語を複合させる方法によることが多い。例えばトコヤミ、トコヨ、トコミヤは、トコ(常)と、ヤミ(闇)、ヨ(世)、ミヤ(宮)とを重ねた語である。これらのことは一目で分ることである。これに対し、トキハという語は一見トコと関係がないように見える。しかしこれはトコ(常)イハ(磐)の約(tokiwa←tokiwa)であり、これもまた二つの語の複合による造語である。こうした造語の仕方が日本語では普通であるが、日本語の造

有	ル(連体形)	aru+aku → aruaku → araku	アラク
散	ル(連体形)	tiru+aku → tiruaku → tiraku	チラク
来	ル(連体形)	kuru+aku → kuruaku → kuraku	クラク
為	ル(連体形)	suru+aku → suruaku → suraku	スラク
見	ル(連体形)	miru+aku → miruaku → miraku	ミラク
恋フル(連体形)		koPuru+aku → koPuruaku → koPuraku	コフラク
告グル(連体形)		tuguru+aku → tuguruaku → tuguraku	ツグラク
知レル(連体形)		sireru+aku → sireruaku → sireraku	シレラク
恋ヒム(連体形)		koPimu+aku → koPimuaku → koPimaku	コヒマク
有ラヌ(連体形)		aranu+aku → aranuaku → aranaku	アラナク
通ヒケム(連体形)		kemu+aku → kemuaku → kemaku	カヨヒケマク
更ケヌル(連体形)		nuru+aku → nuruaku → nuraku	フケヌラク
有リケル(連体形)		keru+aku → keruaku → keraku	アリケラク
明カシツル(連体形)		turu+aku → turuaku → turaku	アカシツラク
——・——			
寒	キ(連体形)	samuki+aku → samukiaku → samukeku	サムケク
悲シキ(連体形)		kanasiki+aku → kanasikiaku → kanasikeku	カナシケク

語法にはこれとは別の、母音の交替によるものがある。例えば、サヤグに対してソヨグがあり、タナビクに対してトノビクがある。これは音の形は相違するが、表わす意味はほぼ同じである。しかもこの場合、奈良時代にはソヨとかトノとかの母音は大体オ列乙類の音で、sayaγ～syō, tana～tonō という対立の関係になるのが普通である。こういうa～oという対立（つまり母音の交替）による語としては次のようなものをあげることができる。

ama(□)～ōnō(□), asa(浅)～ōsō(麻・朝), kata(片)～kōtō(片), kawara(瓦音語)～kōwōrō(瓦音語), tanagumori(たな曇り)～tōnōgumori(との曇り), tawawa(撓わ)～tōwōwō(撓め), agari(上り)～ōgori(峰り), tamari(溜り)～tōmari(止り)

こうした関係を方式化して、a～ōの母音交替による造語法として確認すれば、四yōと八yaとの関係は前より一層確実なものと理解できよう。つまり、母音の交替によって、倍数関係を構成したと見るのである。また、タダヨヒという動詞と、トドメという動詞の根源的な関係も推定できるようになる。tadayori, tōdōmeにおけるtadaとtōdōとは形の上ではa～ōの母音交替である。そこで意味を調べると、tadayoriとは、静止せず、多少の動きはありながら全体として一つの方向へは動かずに浮遊した状態であり、tōdōmeも、全然動かさないのではなく、多少の動き（馬ならば足だけばたばたさせるなど）は許しても、全体としては進行させない状態をいう。こう見るならば右の二つの語の語幹である、tadaとtōdōとは根源的に同一であることが分る。つまりtadaとtōdōとは、同一の語の母音交替形である。

また、タタヘ（張）とトトミ（潮満）との二語の間には普通には語源的関係が認められていないが、tataréとtōtōmiとではtata, tōtōと母音交替をなしている。この両者はともに水などが満ちて一杯にふくれるさまをいう。従って両者は同一の語源から二形に分れたもので、意味は語尾によって多少の相違を来たしたものと見られよう。

こういう擬音語・擬態語を中心とする母音交替だけでなく、日本語の代名詞には、この母音交替という造語法によって微妙な差異を区別するものがある。

(三)

この母音交替による造語法はa～ōだけでなく、少数ながらō～īの間などにも見られる。例えば、ソ（其）とシ（其）とか、ノル（似）とニル（似）とかである。この場合のソ（其）やノ（似）は母音がōで、シやニのiと交替している。

kōru(籠)～kiru(切), nōru(宜)～niru(宜), ōkō(息)～iki(息), kō(此)～ki(此), nō(能)～ni(能), nōgare(逃)～nige(逃)

これらの例はō～īの母音交替による造語法である。このような方式が確認されると、例えばオコス（起）、オコル（興）の語源を考える上に一つの示唆を受けることができる。つまりこれらのōkōがiki(息)の母音交替形であるとすれば、オコルとは、息づきはじめる、オコスとは息をつかせ活動力に目ざめさせる意と考えることができよう。

なお、母音の交替だけでなく、子音の交替の例がある。例えばニラとミラ（海）、ニホドリとミホドリ（鳰鳥）における、niとmiのようなものである。nira～mira, niwodori～miwodōriにおいてはnとmとが交替している。これは、語頭だけでなく、語中にも現われることがある。トニ（明）をトミとするごときである。toni～tomiとはつまりni～miの交替が、語中においても起っているわけである。

漢文訓読語と女流文学語

漢文の訓読は奈良時代から始まったと見られるが、訓読にはシナ語と日本語とにわたる広く深い学識が必要である。訓読すべき文献も多い。そこで誰かが句読をつけて訓読すると、弟子はそれを原本に書き込むようになった。現代の学生がヨーロッパ語の教科書に、教師の翻訳を書き込むのと似た事情である。また、弟子たちに正しい訓読を教えるために、丁寧に訓法を書き込んだ経典も作られた。訓読は、はじめのうちは原文の意味がこなれた日本語になるように、翻訳の仕方の上で種々の工夫が比較的自由に行なわれたらしい。しかし平安時代初期に、遣唐使の派遣もやみ、海外からの文化的な刺激が減り、一方藤原氏の專権も顕著になって、社会に一種の停滞が起ると、それに応じて漢文の訓読も先人の型式を守り保つ、固定が起った。

一方、平安時代には女性は一般に漢文を読まず、漢字を書かなかった。そして私的な文字として女手（仮名）が工夫され、書簡や、私的な遊びである歌合せなどに使われていた。ところが、九〇五年に古今集撰進の命が下った。その古今集が女手で書かれたことから、女手が社会的に公認された形になり、女手で文章を書く道が開けた。そこで、宮廷や貴族の女性層に対して、比較的下級の官僚や学者たちが読み物を女手で書いて献上した。土佐日記や竹取物語などがそれである。これには絵まで添えたものも作られて好評だったらしく、大いに読まれ、やがて女性自身の中から執筆者が現われるようになった。それがかげろふの日記や枕草子、源氏物語などである。

このことはすでによく知られたことであるが、ここにいう漢文訓読の文体と、女流文学の文体との間には、種々の相違が見出される。漢文訓読体は、もともと漢文なのであるから、訓読文にも当然漢語が極めて多い。その漢語の大

部分は漢字の音のままでよい。この点でまず女流文学語と根本的に相違する。平安女流文学の言語では、漢語は多くても一割前後で、他はすべて和語である。しかし、漢語の多少という点を除いても、両文体で用いる和語について、やはり異なる点がある。このことは、最近の研究によってかなり分るようになって来た。

大体日本語の文章では、文体の特徴は、接続詞、助動詞、副詞の上に顕著にあらわれるものである。例えば、現代の文章語では、少し改まって書くと「しかしながら」とか、「従って」などの接続詞を使う。それに対し、同じ意味を口語では「だけど」とか、「それだから」などという。「しかし」とか「しかしながら」を使う文章の中へ「だけど」という接続詞を混入させることはない。また「…なのである」などという文の終止の形は、口語では使わない。これと類似の事実が漢文訓読体と平安女流文学語との間に見られるのである。

副詞
- カツテ — ハナハダ — モシクハ — ヒソカニ
- つゆ — いと — もしは — みそかに
- コモゴモ — ミダリニ — ツトニ — スミヤカニ
- かたみに — みだりがはしく — はやく — はやくとく
- カルガユヘニ・カレ・ココヲモテ — シカウシテ — シカルニ — シカルヲ — さて
- しばし — されど

接続詞
- されば

助動詞の役をするもの
- ゴトシ — やうなり
- シム — す・さす
- ザル — ぬ
- ザレ — ね

右側の訓読語と左側の女流文学語は、意味上ほぼ等しいにかかわらず、右側の語は女流文学語で使わず、左側の語は漢文訓読体で使わない。この差違は、単に特定の単語を一方の文体だけで使うということだけでなく、同一の語を用いても、二つの文体の間では意味に相違のあることさえある。例えば、ウルハシという語は漢文訓読体では美人の形容に多く使われるが、女流文学語では「うるはし」は、きちんと整っているというのが基本の意味である。また、タケシは訓読体では勇猛の意であるが、女流文学語では世間体が立派だの意をもっている。また、「ものす」というような動詞は漢文訓読語としては全然用いられない。

こうした語彙上の対立を心得ておくことは、まれに女流文学の文章の中に混用される漢文訓読語にこめられている特殊なニュアンスなどを読み取ったり、あるいは、女房によって書かれた平安女流文学の特殊性を理解する上で、極めて重要なことと思われる。そこでこの辞典ではできるだけこの差違を指示した。

アクセント

現代日本語の各地のアクセントは、ほとんど残るくまなく調べられている。それは京都式と東京式と、一型アクセント地域との三つに分けられる。京都式と東京式とでは単語によって全く逆のアクセントになることなどは人々によく知られている。

このアクセントは、京都の言葉については、時代的にさかのぼって、江戸時代、室町時代、鎌倉時代それぞれの記録があり、院政時代頃までは各々の単語について、各音節ごとに知ることのできる資料がある。例えば院政時代に成立した類聚名義抄という漢和字典があるが、これには次のような形でアクセントがつけてある。

降　ノソク　クタス　オル　オトス

片仮名の左下につけられた点は平(低く平らな調子)、片仮名の左上につけられた点は上(高く平らな調子)、一点は清音、二点は濁音のしるしである。このようにして当時の単語のアクセントと清濁を知ることができる。古くは日本語のアクセント符号は六つ区別され、平(低く平らな調子)、東(下降する調子)、上(高く平らな調子)、去(上昇する調子)、徳(上声に促音を加えたもの)、入(平声に促音を加えたもの)の六声であったというのが最近の研究である。

このアクセントを考慮に入れると、次のような事実がある。例えば、イタス(致)、イタダキ(頂)、イタダク(戴)、イタル(極)は、頂上・極点を表わすイタという語根による語と見られるが、これらの語のアクセントはすべて高くはじまる点で共通である。ところが、イタム(傷)、イタシ(烈)、イタツキ(病)、イタハシ(労)、イタハル(労)など、イタ(痛)を語根とする語群は、アクセントがすべて低くはじまる点で共通である。

このように、多くの場合において語根を同じくする語のはじめのアクセントの高さは同一である。これには多少例外と思われるものもあるが、このことは大体において言いうることである。従ってこれは、語源を考える上で利用できることがある。

例えばアザ(痣)とは人の気持や状態にかまわず、所きらわず顕著に現われるものであるが、ザザワラフとか、アザケル、アザムクというのは、いずれも相手かまわず勝手に笑い、大声を出すという共通の意味をもち、かつ、アクセントが共に高くはじまるという共通点がある。そこで、これらの動詞にアザという共通の語根が推定できる。かような考慮にもとづく語源説を、この辞典で取り入れたところがある。

記号・略語表

記号

【　】見出し語の漢字表記
〔　〕名詞を活用させてできた動詞の語幹
　　語尾を示す
〔　〕品詞または活用の種類
〔　〕位相注記
《　》語源・語史・語法などに関する概括的解説
（　）解説・用例中の注記
［　］用例中の補記
〈　〉出典名。読みがな（歴史的仮名遣）
┃　追込項目（親項目に相当する部分）
！　同右（親項目が活用語の場合）
｜　用例中の見出しに相当する部分
¦　同右（見出しが活用語の場合）
：　読み方表示の省略部分
⇩　…を見よ
↓　…を参照せよ
▽　補足的説明
↑　上代特殊仮名遣
*　推定形
↓　音韻変化などの推移
～　母音交替形
／　連俳用例の前句と付句との区切り

一二三四…一二三四　品詞による分類
❶❷❸…(1)(2)(3)　左より上位の分類
①②③…(1)(2)(3)　一般の語義分類
㋑㋺㋩…(イ)(ロ)(ハ)　右より下位の分類

品詞・活用の種類

代　代名詞
名　名詞
副　副詞
連体　連体詞
接続　接続詞
感　感動詞
動詞　動詞（活用の種類不明のもの）
四段　動詞四段活用
上一　動詞上一段活用
上二　動詞上二段活用
下一　動詞下一段活用
下二　動詞下二段活用
カ変　動詞カ行変格活用
サ変　動詞サ行変格活用
ナ変　動詞ナ行変格活用
ラ変　動詞ラ行変格活用
形　形容詞（口語形）
形ク　形容詞ク活用
形シク　形容詞シク活用
連語　連語
接頭　接頭語
接尾　接尾語
助　助詞
助動　助動詞

出典のジャンル

謡　謡曲
幸若　幸若舞曲
説経　説経浄瑠璃
浄　浄瑠璃
俳　俳諧
雑俳　雑俳
伽　御伽草子
仮　仮名草子
咄　咄本
評判　遊女評判記・役者評判記
浮　浮世草子
黄　黄表紙
酒　酒落本
滑　滑稽本
合巻　合巻
人情　人情本
伎　歌舞伎
西鶴　井原西鶴の浮世草子
近松　近松門左衛門の浄瑠璃・歌舞伎

出典略称（五十音順）

宇津保　宇津保物語（前田家本）
落窪　落窪物語
かげろふ　かげろふ日記
記　古事記
紀　日本書紀
記歌謡　古事記歌謡
紀歌謡　日本書紀歌謡
玉葉　玉葉和歌集
金葉　金葉和歌集
源氏　源氏物語
後紀　日本後紀
古今　古今和歌集
古今六帖　古今和歌六帖
後拾遺　後拾遺和歌集
後撰　後撰和歌集
古本説話　古本説話集
今昔　今昔物語集
狭衣　狭衣物語
更級　更級日記
詞花　詞花和歌集
拾遺　拾遺和歌集
盛衰記　源平盛衰記
続紀　続日本紀
続後紀　続日本後紀
続古今　続古今和歌集
続後拾遺　続後拾遺和歌集
続後撰　続後撰和歌集
続拾遺　続拾遺和歌集
続千載　続千載和歌集
新古今　新古今和歌集
新後拾遺　新後拾遺和歌集
新後撰　新後撰和歌集
新拾遺　新拾遺和歌集
新続古今　新続古今和歌集
新千載　新千載和歌集
新勅撰　新勅撰和歌集
新葉　新葉和歌集
住吉　住吉物語
千載　千載和歌集
曾我　曾我物語（大山寺本）
竹取　竹取物語
著聞　古今著聞集
堤中納言　堤中納言物語
徒然　徒然草
土佐　土佐日記
浜松中納言　浜松中納言物語
風雅　風雅和歌集
夫木抄　夫木和歌抄
平家　平家物語
平治　平治物語
平中　平中物語
保元　保元物語
枕　枕草子（三巻本）
万　万葉集
大和　大和物語

出典要覧

主として中世・近世の出典のうち、一般にはなじみが薄いかと思われる文献名を便宜類別し、五十音順に列挙しておく。

仏書・法語

阿彌陀経見聞私
一休水鏡
一遍聖絵
一遍上人語録
雲居和尚往生要歌
栄玄記
塩山仮名法語
塩山和泥合水集
改邪鈔
覚海法語
帰命本願鈔
孝養集（うらうら）
禁断日蓮義
空善記
倶舎論頌疏釈疏抄
口伝鈔
月庵法語
見聞愚案記
西方発心集
西要鈔
実悟記
実悟旧記
拾遺語燈録
宗門葛藤集
正源明義抄
聖財集
浄土真宗小僧指南集
諸神本懐集
真宗教要鈔
説法式要
存覚法語
他阿上人法語
他阿上人法語
沢庵法語
他力領解鈔
妻鏡
東海夜話
道元法語
盤珪禅師御示聞書
百座法談聞書抄
百法問答聞書
父子相迎
普通唱導集
仏通禅師枯木集
父母恩重和談抄
反故集
法然上人行状絵図
法華経直談鈔
発心直入路
本願寺作法
本福寺跡書
万法蘊識鈔
夢中問答
盲安杖（いろうん）
横川法語（ほうご）
蓮淳記
蘆鞍橋
和語燈録

仮名抄

室町時代から江戸時代にかけて行なわれた仏書・漢籍・国書などの講義・注釈の記録。本辞典では、室町・江戸時代初期の国語資料として用いた。

永平録抄
格致余論抄
寒山詩抄
漢書竺桃抄
漢書抄
観音経鈔
管蠡鈔（かんれい）
玉塵抄
錦繍段鈔
禁帯集
継天筆語
黄鳥鈔抄
江湖風月集聞書
江湖風月集註抄
江湖風月集略註抄
巨海代抄
湖鏡集
御書抄
狐媚鈔
古文真宝講述
古文真宝抄
金頌抄
左伝春秋抄
左伝聰塵
山谷詩抄
三社託宣鈔
三社託宣略鈔
三体詩抄
三体詩絶句抄
三百集
三百則抄
三略講義
三略抄
三略撮抄
詩学大成鈔
四河入海（しかい）
史記抄
巵言抄（しげん）
七書評判
四部録抄
周易集註鈔
周易抄
周易秘抄
朱子家訓私抄
春鑑鈔
春秋抄
貞永式目抄
勝国和尚再吟
尚書抄
職原抄私記
真歇拈古鈔
神代紀環翠抄
神代紀桃源抄
性理字義抄
禅儀外文盲象鈔
荘子抄
孫子私抄
大恵書抄
大恵長書抄
大淵和尚再吟
大淵代抄
大学抄
大智禅師法頌抄
中華若木詩抄
中庸鈔
長恨歌聞書
長恨歌抄
庭訓抄
庭訓之抄
燈前夜話
杜詩抄
杜律五言鈔
杜律私記
杜律七言鈔
杜律集解詳説
日本書紀抄
人天眼目鈔
八卦抄
百丈清規抄
扶桑再吟
碧岩抄
蘆葦抄（ろい）
卜筮元龜鈔
本則抄
無門関私抄
無門関抄
蒙求抄
蒙求聰塵
毛詩国風篇聞書
毛詩抄
湯山聯句鈔
臨済録抄
蠡測集（れいそく）
朗詠鈔
老子経抄
六物探嫡抄
六物図抄
論語抄

歌学書

奥儀抄
古来風体抄
耳底記（じてい）
正徹物語
俊頼髄脳
能因歌枕
野守鏡
袋草紙
筆のまよひ
毎月抄
無名抄
八雲口伝
八雲御抄
和歌初学抄

連歌書

吾妻問答
老のくりごと
老のすさび
九州問答
景感道
撃蒙抄
撃求抄
古今連談集
ささめごと
至宝抄

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com